

2024年12月30日（月）

老球の細道845号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今頃になると孫たちの年に歌った滝廉太郎作曲の童謡「お正月♪」を思い出す。「もういくつ寝るとお正月♪」と大きな声で何度も何度も歌い、お正月にやりたいことを替え歌にして楽しんだ頃が懐かしい。「天声人語」に「日は1日ごとに長くなる。しかし寒さの本番はこれからである。そのすれ違いがいつそう、小さな一輪がほころぶ日を待ち遠しくさせる」と作家陳瞬臣の言葉が紹介されていた。「毎日がお正月、毎日が大晦日、毎日が休日」の今の私にはそんな楽しみも、風流もないが、終わりは始まりなり、始まりは終わりなり。今までやって来たことをアップデートしながらやり続け、歩き続けるのみである。良いお年を！

1・読書から

◆「トーナメントで大事なことはチームを波に乗せること。波に乗せるには複雑なことをしてはいけない。この大会はこれでいくぞというはっきりした方針を選手に与えること」〈『モダンサッカーへの挑戦』加茂周著：講談社〉：ウインターカップ等では思いもよらぬチームが決勝まで進み、実力校が途中で敗退。トーナメントの戦い方は「KIS」（Keep it simple）。

◆「反復と努力こそは凡人がみずからを高めるためになしうる唯一のこと」〈『大人のための偉人伝』：木原武一：新潮選書〉：やり続ける者は成功し、歩き続ける者は目的地に到着する。やり始めたことを投げ出さず、休まないで続けることが平凡を非凡に変えていく。

◆「指導者は才能なきことを憂う必要はないが、熱意なきことを恐れなくてはならない」〈『指導者の条件』松下幸之助著：PHP文庫〉：まず燃えよ。燃えない焚火を誰が囲もうか。コーチは情熱と学ぶことをやめた時、潔くコート去るべきである。選手に失礼である。

2・新聞から

◆「いつの時代も、戦争による死者のことが忘れられた時に新しい戦争が始まる」〈朝日：ひと：浅田石二〉：ノーベル平和賞を受賞した日本被団協に力を与えた歌「原爆は許すまじ」の作詞者の言葉。来年は戦後80年、昭和100年。明日は我が身であることは戦争も同じ。

◆「多くの人に伝えたいなら、たった一人に伝えること」〈朝日：折々のことば：古館伊知郎〉：バスケ講習会でも私は最もやる気のある選手を相手にプログラムを進める。やる気のない人たちを「やる気満々」の状況に誘い込む。コーチ、選手A、選手B、三方良し。

◆「メジャーでは、尊敬される人は『いい時も悪い時も、いつも一緒だよ（英語和訳）』という言葉でたたえられます。感情的にならず、精神的に安定した人こそ一流です。そんなリーダーのいるチームは強いです」〈朝日：インタビュー：菊池雄星（野球）〉：自分がうまくいかない他人をなじるエースがいる。そのようなチームが勝つのは見たことはない。

◆「何かしたいことを、いつかやろうと思っていると、いつかは来ない。いまやらないと。今日が一番若いんです」〈朝日：多事奏論：河合真美江〉：今は亡き義父がいつも言っていた。「お化けと“そのうち”には今までであったことがない。「そのうちに」という約束はしない。